

No.22

1999年

(平成11年)

同窓会だより

— 発行 —

旭川荘厚生専門学院
同窓会

岡山市祇園地先

TEL (086) 275-0145

FAX (086) 275-3283

— 編集責任者 —

同窓会会長 中尾 絹江

共生と思いやり



同窓会会長

中尾 絹江

同窓会だよりをお送りして、早二十二年になりますがお元気でしょうか。戦後五十四年を経たこの夏、二十一世紀に向け「本当に大切なものは何か」を改めて思い巡らせている

岡山支部だより

岡山支部長 西野 順子

残暑の候を迎え、同窓生の皆様、学院の先生方には、益々のご健勝の事とお喜び申し上げます。

さて、第5回同窓会岡山支部会を平成十年二月十四日、バレンタインデーに『まきび会館』で盛大に開催することができました事、思い出さなっております。今回は指図を変えて、旭川荘内職員で結成している「テイク（5）ファイブ」を招き歌と、演奏と、ダンスに気分も最高潮に達し、楽しく、なごやかに過ごせた一日でした。これもひとえに皆様方、先生方のご尽力のおかげと深く感謝致しております。誠にありがとうございました。

今後、支部会は五年に一度となり、平成十五年度に予定致しております。皆様のご期待に添えるよう役員一同

今日この頃です。今や物至上主義の時代は終わったのではないのでしょうか。少子高齢化社会を現実目の当たりとする今、「若」から「老」そして

数力ながらも尽くしたいと思っております。ご支援とご指導の程、何とぞ宜しくお願い致します。皆様の一層のご健康とご多幸、学院の発展をお祈り申し上げます。

関西支部
同窓会に関わって

看護科五期 吉川千代子

同窓生の皆様ご健康で活躍の事とお喜び申し上げます。私達は平成十一年五月二十三日（日）に第四回関西支部同窓会をホテルコンソルトで開催致しました。開催にあたり二百三十名程の方に案内の封書を送付。そのうち六十名の方より、諸事情で不参加の返事をいただきました。また住所不明のために返却されたものもあり、同窓会への参加は二十名にとどまりました。学院からは羽井佐先生の参加をいただきました。もっ

「生」から「死」何人も避けては逃れぬこの運命……真剣に考えるべき時期、共に生き互いに思いやりをもつて、私たちの身近なところから、失っているものを取り戻していきたいものです。

私達同窓生は「人と人を繋ぐ」総合福祉精神でもって、これまでの経験と知恵をフルに発揮し、一歩でも好ましい方向へと導こうではありませんか。

皆様のおたよりを同窓会事務局までお寄せいただけたら幸いです。

広島支部だより

広島支部長 松田 憲尚

いものです。これからは協力程よろしくお願い致します。

同窓生のみならず、お元気で活躍のことと思います。昨年は母校を訪ねることはありませんでしたがいまも四季折々の花が咲いていることとでありましょう。花を育てるには、それなりの苦労があるように、若い看護婦を育てることもまた大変であると痛感することあります。今までは、一対一の真剣勝負（別に勝ち負けを問うわけではありません）で、その姿を垣間見てお互いが学んできたように思われ、それゆえ自身自身の真剣さが問われて来たんだらうと思います。しかし最近の若い方には、それでは通じないものがあるような気がいたします。看護実践力を規定するものを四つ挙げるとすれば、意志・環境・知識・判断となりましょうか。花を育てる心を振り返りながら、四つのものをいかに息吹かせるかが、これからの私の課題となりましょうか。

同窓会の席で一緒に写真を撮って頂いたものを送って下さったにも関わらず未だにそのお礼を述べていない非礼をここに深謝いたします。ただ、先生の仰る通りにあの手この手を駆使しながら、正しいと思うことには向かっているつもりです。

この秋、広島で同窓会を行います。是非みなさん先生方お越し下さるようお願いいたします。後日詳細をご案内させていただきます。

谷口 佳代	竹本 博明	難波 正三	片山 晴美	日笠多喜夫	小島 真弓	坂手 行義	竹本 博明	森 繁樹	竹原 成信	近藤奈美子
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------

各科の近況報告

児童福祉科

専任教員 黒田とも子
仁科 朋子

卒業生の皆様、元気で活躍のことと思います。児童福祉科は今年五十一名の新生(二十九期生)を迎えました。入学者の中には、卒業生の姉妹や娘さん、また近隣の方々も多く、これも卒業生の皆様方のお陰と感謝しています。

職員は昨年同様、尾坂科長を中心に一丸となって頑張っています。今日は、黒田・仁科の最近のトピックをお知らせします。

先日二十二期生の方からいただいた「職場を案内したいのでおいでください」というお手紙を手に、私達は早速そこへ出かけました。一日二日の日程で職場や近くの観光地を案内していただきました。職場では、職員や利用者の方々から信頼され、頑張っている姿を見て安心すると共に、成長した姿に感激しました。私達は一期生から二十九期生まで大切な児童福祉科の一員と思っています。学院の方には、中途採用や臨時職の情報も入って来ますので、お力になればと思っております。ぜひ、皆様の近況をお知らせ下さい。

介護福祉科

専任教員 近藤奈美子

卒業生の皆さんにおかれましては、お元気に活躍のことと存じます。現在、介護福祉科は、第十二期生

を迎え日々介護専門職者を目指して、机上の勉強と実習に精一杯、頑張っています。

一年生は、初めての定期試験を終え、一息ついている人、再試験に臨む人など、それぞれです。いずれにしても学院で迎える初めての夏休みです。

二年生は、就職活動の正念場の時期となり施設訪問や採用試験の受験にと東奔西走の毎日です。また、四年制大学の三年編入を狙う人は、夏休み返上で英語や専門の勉強に前向きに取り組んでいます。

さて、来春より公的介護保険がスタートします。介護の現場で働いていらっしゃる卒業生の方々にも、画期的な年となり、お忙しいでしょうが、暇をみつけて母校へ足をお運びください。お待ちしております。

お身体に気をつけて、一層の飛躍をお祈りしております。

福祉研究科

教務主任 池田 明子

福祉研究科の現状について

平成十二年度より介護福祉士養成課程では訪問介護実習が必修化されることになりました。その先行的取り組みとして訪問介護実習を岡山県川上町と連携し実施しました。実習期間は一週間で在学生全員宿泊しました。川上町は、高齢化率三十五％という町でヘルパーや看護婦の在宅訪問や社協の広報活動など実習をとおり、町ぐるみの福祉の取り組み

や訪問介護の現状を学ぶ機会になりました。

福祉研究科も今年で開設五年目を迎え、現在七十九名の保育士を持った介護福祉士を社会に送り出しています。初年度卒業されて介護実務をされている卒業生はあと少しで、ケアンエージャーの受験資格もできるなど、五年という歳月の意味も社会的に生まれてきつつあります。

今後ますます、活躍の場が広がりが実力をつけて行っていくように期待しております。

福祉情報科

教務主任 橋本 勇人

福祉情報科の近況報告について

福祉情報科は、医療・福祉・秘書・情報処理の統合を目指して平成二年に開学した、一学年の定員三十名のコンパクトで、全体の潤滑油の役割を果たしている学科です。

福祉情報科では、昨年から医療情報学で学位を取得した若い(当時二十六歳)の新進気鋭の男性教員を迎え、学生たちの授業に対する「目の輝きも変わってきたように思います(ただし、非常にガードが固いのが玉に傷です)」。また、研究室には絶えず何人かの卒業生が遊びに来ており、卒業後も絆が強いのが特徴です。

また、昨年の就職状況は、岡山済生会総合病院の事務職などを中心にほぼ全員の就職を決めることができました。これも、同窓会の皆様や福祉情報科の卒業生が、現場で信頼を勝ち得ていることによるものであり、感謝いたしております。

なお、昨年の卒業生のうち、四名が旭川市内に就職しており、将来の同窓会幹部候補生(使って便利な情報

報さんOG)も目白押しです。

第一看護科

教務主任 江口 瞳

二十世紀に期待される看護職の育成

看護職の育成を

近年、医療や看護を取り巻く社会環境はめまぐるしく変化し、少子化、高度医療化、あるいは、臓器移植等に伴う諸問題を抱えながら、来年はいよいよ介護保険の導入と、急激に様変わりをしていく現実です。そして、看護に期待される社会のニーズも高度化し、多様化してきています。

こうした背景の中で、看護教育においてもカリキュラムの変更が行われ、また、看護系の大学化が進む一方で、平成十一年度からは専門学校から大学編入への制度も認められるなど、本当に刻々と変わりゆくのを感ずる今日です。

第一看護科では、新しいカリキュラムで教育を受けている人たちがすでに三年生となっています。三年生はほとんどが臨地実習ですが、その実習先では、悩みや戸惑いを感じながらも、学内で学んだ知識と技術を駆使しながら、その人のニーズに応えようと精一杯励んでいます。

今年の看護師国家試験では、全員合格という大変喜ばしい結果でした。また、保健師学校等への進学者が三名いましたが、そのうち一名は大学に編入できました。卒業生は大多数が病院や施設で働いていますが、中には、海外に留学して頑張っている人もいます。それぞれに自分の夢を実現して頑張っているようすが伺え、とても頼もしく思っています。

私たちは、学生たちが、基礎的な知識と技術をしっかりと身につけ、ひとりひとりが優しさといわわりのもてる人に育ってほしいと願っています。

第二看護科

教務主任 羽井佐米子

二〇〇〇年には三〇期生を迎えます

学院は昭和四十六年の創設から、来る二〇〇〇年という節目に三周年を迎えることになりました。

第二看護科も今年度はカリキュラムの改正により、老年、在宅、精神看護学が新たに学科科目に位置づけられ、一年次に基礎実習が入ったりと、教育内容も変わってきました。

そのため一年生は七月末に基礎実習を三施設で行い、大きな感動や勇気をもたらしたり、看護について深く考える体験をさせていただきました。

二年生は、隣接する訪問看護ステーションで、職員と一緒に訪問看護の実施、またデイサービスセンターでの高齢者への関わりや訪問入浴の援助など、貴重な体験を積んでいます。改めて旭川市の学院の意義と、恵まれた実習環境に感謝の気持ちを強くしています。

今年度の看護師国家試験の合格率は第二看護科も一〇〇％でした。看護の現場も年々厳しくなり、学生もそれに応えようと頑張っています。卒業生の皆様との情報交換などできれば嬉しいと思います。機会があれば是非学院にお寄りください。

卒業生だより

児童福祉科
二十五期生
坪井須美子

卒業して懐かしい毎日を過ごしている。二年間たつてしまっている事にふと気づきました。私は、知的障害のある方たちと、日々過ごしています。畑仕事をしたり、一緒に食事を作ったり、小さな子どもたちとは駆けまわって遊んでいます。私自身、子どもを育てた事がないためか、子どもたちに何かを伝えることが難しく、先輩職員の手を借りながら、悪戦苦闘している毎日です。でも、子どもたちに助けられながら一緒に成長できれば、思っています。

ところで、二十五期生のみなさん、お元気ですか？ 遠く離れた実家に帰っている人もいれば仕事に明け暮れている人もいます。私は、学生時代同様に元気で、相変わらず山の中に住んでいます。そんな私をよそに、結婚してたり、母親になつていたり友達がいますが……。それぞれの道を今日まで進んできて、大変な事もあったと思いますが、どんな時も、笑顔で忘れることなくいましうね。

介護福祉科
九期生
難波佐千子

お世話になった先生方、九期生の皆様、学院を無事卒業して一年以上がたちますが、いかにお過ごしですか。

私は、老人保健施設に勤務しています。一年目は、業務を覚えることが精一杯で、担当を持たせてもらっても、一般的なことしかできませんでした。

そんな時に担当した方は、常に頭内に痰があり、誤嚥の危険がありました。先輩の指導を受けながら、努力して介護計画を立て、毎日残っては、実行していました。その介護の中で、その方にとっても愛着をもつようになりまし。その頃から、自分のしたいことが、なんとなくで見えてきました。そして、つい最近、その方は退所して行かれました。私も現在はデイケアの担当をしています。

私は、このケースの介護を通して「介護」とは、相手のことをどれだけ好きになれるかで、かわってくるものなのだと思います。これから「介護」を通して皆さんのことを学んで行きたいと考えています。

福祉研究科
四期生
同前 佳枝

社会人として迎える初めての夏。この夏も終わろうとしています。

五か月が経つ今、周りが少しずつ見えてきて、この仕事にはチームワークがとて大切だと気づきました。自分の一日の仕事をつなぐ事も必要だけれど、「少し時間に余裕があるから手伝おう」という気持ち……。これは、この仕事においてだけのこ

とではないですが、やはり、お互いを尊重しながら働くという事が特に大切ですね。「毎日勉強」だと改めて実感します。毎日、自分に何らかの課題が押し寄せて来るように思います。

そして、「ここで頑張らないと!!」と思つたら、まだまだ、辞められないですね。自分に負けません。だから、これからも、自分らしく自分なりに頑張っていこうと思つています。

福祉情報科
六期生
山本 和子

先日、旭川市で行われた花火を見に行きました。図書館の壁がきれいになっていてのを見つめ、嬉しくなりました。あのころのことをぼんやりと思い出しながら、月日が経つのは早いものだと感じさせられました。

私も市内の老人病院に就職して三年目になります。日々の業務におおねがらも、患者さんの笑顔を見ることで元気づけられたり勉強になることもたくさんあります。業務以外にも、高齢者ケアについての勉強会なども行い介護福祉士になるために必要な知識や技能を身に付けようと努力しています。このほかにも現在私たち職員が力をいれていることは、接遇についてです。仕事をしているときだけでなく、いつでもどこでもだれと会っても、相手の立場に立つてものを考え、相手に気を配り、その出会いの場を快適にすることが私達には必要なのだと考えさせられています。難しく書いてしまいましたが、仕事も私生活も私なりに楽しく過ごしています。

私生活はいいいますと、最近バス

コンに興味を持ちメールを楽しんでいます。在学中は、検定などでパソコンと向き合っていました。それから全くパソコンと縁がなくなっていました。あの頃はパソコンが嫌いだった私も今はいろいろなことが発見できて嬉しいですね。

八月二十五日から一週間の間、うちの病院にも情報科から実習生が三人来ました。私達の頃と変わっていない水色の実習着を見て、とても懐かしさを実習時のあの緊張感を感じました。実際に社会に出て役に立つたのは、机に向かって勉強よりも実習で学んだことのほうが多かったように思います。実習生の皆さんには頑張ってほしいです。

最後になりましたが、情報科六期生の皆さんこれからもお互い忙しい日々が続くと思いますが、また元氣な笑顔で会えたらいいですね。

第一看護科
十五期生
出口 輝美

十五期生の皆さん、お元気ですか？ 学院を卒業して早いもので五年目を迎え、中堅クラスと成りましたね。

先日、勤務先の病院で、卒業三十五年目の看護婦を対象に「看護観を振り返ってみよう」というテーマで研修が開かれました。私は今、ICUで勤務しており、業務の忙しさや、緊迫した中で自分に余裕も持たず、決して無視している訳ではないけれど、患者さんの事はどうしても後回しになってしまっています。そんな中、学生三年目の実習記録や卒業文集に目を通してみると、私は何度も「心の看護を大切にしたい」と書いてありました。医学にばかりに、ついで目を光らせてしまっている現状にある

私。看護婦である前に、一人の人間として、常に患者さんやその家族に接していかねばならない、と、改めて考えさせられました。「私のやりたい事って、こんな事だったの？」と、疑問に抱く事が多々あった私にとって、今回の研修やこの機会は、初心に戻らせてくれた大切な時間でした。これからも、この気持ちを決して忘れる事のないよう、頑張っていこうと思います。

第二看護科
二十三期生
近藤 恭子
(旧姓 行本)

私は、第二看護科を卒業後、旭川児童院へ就職し現在もそこで毎日頑張っています。

ここは、重度の障害をもった人達が医療と療育を中心とした生活を送っています。障害をもつ人達への看護はとても奥が深く、毎日が新しい発見や戸惑い、そして迷いでいっぱいです。

看護婦としての日々の仕事や勉強に追われながらも、病棟ではすばらしい先輩や仲間と囲まれて、恵まれた環境で仕事ができることをとても幸せに感じています。

今、職場の中に「あんな看護婦さんになりたい」と目指している人がいます。その目標に一つでも近づけるように頑張って仕事を続けていきたいです。

最後に、児童院には、年間たくさん看護学生の方が実習にいられています。みなさんを見ると自分の学生の頃を思い出します。

影ながらガンバレ！
でも
ガンバレ！